

中之条遺跡群

上町遺跡Ⅳ・Ⅴ

—長野県埴科郡坂城町道路改良事業・宅地造成に係る緊急発掘調査報告書—



2009.3

坂 城 町
坂城町土地開発公社
坂城町教育委員会

中之条遺跡群

上町遺跡Ⅳ・Ⅴ

—長野県埴科郡坂城町道路改良事業・宅地造成に係る緊急発掘調査報告書—

2009.3

坂 城 町
坂城町土地開発公社
坂城町教育委員会



上町遺跡Ⅳ・Ⅴ（北より）



上町遺跡Ⅳ・Ⅴ（上空より）

序

坂城町教育委員会教育長 長谷川 臣

今回発掘調査を実施した上町遺跡は、坂城町大字中之条を西に流下する御堂川によって形成された扇状地のほぼ扇中部に立地しています。本遺跡を包括する中之条遺跡群では、かつての発掘調査で縄文時代～平安時代の集落址が確認されています。南側に隣接する町横尾遺跡では縄文時代から平安時代の集落遺跡が発掘調査されました。また、さらに南側には金井東遺跡群が広がっており、同遺跡群の中で最大の遺跡である保地遺跡では縄文時代後・晩期の遺構や遺物が多く発見され注目を集めました。このように、今回の発掘調査地点は坂城町の中でも特に遺跡の多く存在する場所です。






今回の発掘調査では、古墳時代～平安時代の住居址が発見されました。2棟調査された古墳時代の住居址からは、豊富な土器群が出土しました。これらは、煮炊き用の「土師器甕」、貯蔵用の「須恵器甕」、盛り付け用の「高坏」、食事に使う土師器や須恵器の「坏」など、生活に必要な土器類が一そろいになっていました。住居址から出土した遺物を見ることで当時の暮らしぶりが想像できる貴重な発見でした。同時にこれらの土器が使われた時代は南条の青木下遺跡と同じであることも重要です。これらの住居址に暮らした人々は青木下の地で祭祀に参加したのでしょうか。

最後に上町遺跡Ⅳ・Ⅴの発掘調査は、土中に眠る文化遺産の重要性を理解していただいた関係者の皆様方のご支援とご協力によって行うことができました。厚く御礼申し上げます。また、現地において作業にあられた皆様には、異常気象とも言える夏の暑い中、献身的な努力と、古代文化解明へのゆるぎない情熱によって、調査を無事終了させていただいたことを感謝いたします。さらに、関係機関、関係各位には、文化財保護行政の本旨をご理解くださり、ご協力いただきましたことに心から御礼を申し上げ、序文とさせていただきます。

例 言

- 1 本書は、長野県埴科郡坂城町上町遺跡Ⅳ・Ⅴの発掘調査の報告書である。
- 2 上町遺跡Ⅳの発掘調査は、坂城町より委託を受け、坂城町教育委員会が実施した。
- 3 上町遺跡Ⅴの発掘調査は、坂城町土地開発公社より委託を受け、坂城町教育委員会が実施した。
- 4 発掘調査所在地及び面積
上町遺跡Ⅳ 長野県埴科郡坂城町大字中之条1310ほか、約166㎡
上町遺跡Ⅴ 長野県埴科郡坂城町大字中之条1310-1、約153㎡
- 5 調査期間 現地調査 平成20年7月7日～平成20年9月2日
整理調査 平成20年9月3日～平成21年3月19日
- 6 本書の執筆・編集は、赤池・時信が行った。
- 7 本書の作成にあたり、赤池・時信のほか、朝倉、天田、坂巻、萩野が主な作業を行った。
- 8 本書で使用した航空写真は、株式会社写真測図研究所が撮影したものである。
- 9 本書及び調査に関する資料は、坂城町教育委員会の責任下において保管されている。
- 10 本調査及び本書作成にあたって、下記の方々や機関から御配慮を得た。記して感謝の意を表したい。
(敬称略、五十音順)
(社)更埴地域シルバー人材センター

凡 例

- 1 遺構の略号は、下記のとおりである。
SH→竪穴住居址 SB→掘立柱建物址 R→製鉄関連遺構 SK→土坑址 Q→特殊遺構
P→ピット
- 2 遺構名は、時代別ではなく発掘調査時における命名順である。
- 3 本書に掲載した実測図の縮尺は該当箇所のスケールの上に記した。
- 4 挿入図におけるスクリーントーンは、下記を示す。
遺構 →地山(構築土) →焼土 →カマド
遺物 →須恵器断面 →黒色処理範囲 →磨滅範囲
- 5 遺物の挿入図中での表記は、第1図1は、簡易的に1-1と表記した。
- 6 土層の色調は「新版 標準土色帖」の記載に基づいている。
- 7 出土遺物の観察表の法量は、口径・器高・底径の順に記載し、-は不明、()が残存値、< >が推定値、()・< >がない場合は完存値を示し、単位はcmである。

目次

序	
例言	
凡例	
第I章 発掘調査の経緯	1
第1節 発掘調査に至る動機と経緯	1
第2節 調査の構成	2
第3節 調査日誌	2
第II章 遺跡の立地と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第III章 調査の概要	7
第1節 調査の方法	7
第2節 基本層序	8
第3節 検出された遺構・遺物	8
第IV章 調査の結果	11
第1節 竪穴住居址	11
第2節 土坑址	26
第3節 その他の遺構・遺物	33
掲載土器観察表	34
掲載石器観察表	36
第V章 総括	37
写真図版	39
報告書抄録	

第I章 発掘調査の経緯

第1節 発掘調査に至る動機と経緯

上町遺跡は、坂城町大字中之条に所在し、標高430m前後を測る御堂川によって形成された扇状地の扇中部に位置している。平成元年度に作成された『坂城町遺跡分布図』によると、弥生～平安時代の集落址とされているが、同遺跡隣接地に戦国時代の國人領主村上義清の子にあたる村上景国が拠ったとされる観音坂城跡も存在しており、関連する中世の遺構の存在が予想されるなど、古代・中世の遺跡である可能性が高い。平成6年度に実施された高速道路関連道路改良事業にともなう発掘調査によって、古代に位置づけられる集落址が判明している。

今回、この地に町道の道路改良事業及び土地開発公社による宅地造成が計画され、遺跡が破壊される恐れが生じた。そのため、原因者である坂城町建設課、坂城町土地開発公社と遺跡の保護措置について協議を行ったところ、試掘調査を実施して遺跡の状況を確認することとなり、平成20年6月1日に試掘調査を実施した。開発対象地に2本のトレンチを設定して遺構・遺物の確認を行った結果、1箇所の特レンチで遺構が検出された。遺構は開発対象地の西側に集中する傾向が見えた。この結果を基に再度協議した結果、道路拡幅部分と遺構面が比較的浅い箇所に関しては発掘調査を実施し、遺跡を記録保存することとなった。



第1図 上町遺跡IV・V位置図(1:25,000)

第2節 調査の構成

発掘調査体制

調査担当者 時信武史（坂城町教育委員会学芸員）

調査補助員 朝倉妙子、坂巻ケン子（以上、町臨時職員）

調査協力員 太田武夫、佐藤司、竹内佳男、千野正彦、塚田義勝（以上、更埴地域シルバー人材センター）
節田まなみ（長野工業高等専門学校実務訓練生）

整理調査体制

調査担当者 時信武史

調査補助員 朝倉妙子、天田澄子、坂巻ケン子、萩野れい子（以上、町臨時職員）

（事務局）

教育長 長谷川臣

教育文化課長 西沢悦子

文化財センター所長 赤池利博

文化財係 時信武史

朝倉妙子、天田澄子、坂巻ケン子、千野美樹、中沢あつみ、萩野れい子
（以上、町臨時職員）

第3節 調査日誌

発掘調査

平成20年7月7日 発掘調査開始。重機による表土剥ぎ開始。

平成20年7月10日 表土剥ぎ終了。遺構検出開始。

平成20年7月11日 遺構掘り下げ開始。

平成20年8月27日 遺構掘り下げ終了。

平成20年9月1日 遺構実測終了。

平成20年9月2日 航空写真撮影。

平成20年9月3日 埋め戻し開始。

平成20年9月11日 埋め戻し終了。

平成20年度中整理作業及び報告書作成。

第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境

坂城町は北信地方と東信地方の接合点にあたり、善光寺平を構成する更埴地方の最南端に位置する。町の地形は、中央部を貫流する千曲川の氾濫によって形成された氾濫原と、千曲川に流れ込む小河川がつくりだした扇状地によって形づくられた小盆地（坂城盆地）に特徴がある。町の北から東にかけては五里ヶ峰・大峰山・虚空蔵山をはじめとする標高1100～1300m前後の山々が連続し、千曲市・上田市との市町村界を形成し、西は大光山、三ツ頭山などの標高1000m前後の山々が連続し、千曲市・上田市との市町村界となっている。南は千曲川右岸の岩鼻と左岸の半過の岩鼻が狭隘な地形を形成し、上田盆地と隔てられている。このような地形から、古来よりこの地域は千曲川流域の要衝の地として注目されてきた。

この地域の気候は、南北に開けた小盆地状をなしていることから、季節風の影響を受けやすいため、夏季は南風、冬季は北風が強い。また、盆地状になっていることから寒暖の差が大きい。降水量は少なく、日本で最も雨量の少ない地域の一つとされている。現在では、この気候も関連し、工業が主要な産業となっており、農業では、りんご・バラ・ぶどうの栽培が盛んである。

第2節 歴史的環境

ここで、坂城町の各時期について代表的な遺跡を挙げながら、町の歴史的環境について概略的にふれておきたい。（括弧内の数字は5、6ページの坂城町遺跡分布図における遺跡番号を示す）

坂城町で最古の遺物は、約14,000～15,000年前の後期旧石器時代の上ヶ屋型彫刻器とされる石器である。この石器は南条地区の保地遺跡（3-1）より採集されたものであるが、本出土品以外には込山D遺跡に槍先型尖頭器の出土があるが、詳細は不明である。

縄文時代の遺構・遺物では早期押型文系の土器が坂城地区の和平A遺跡や平沢遺跡で採集されている。また、平成12年度に発掘調査が実施された坂城地区の込山C遺跡（30-3）からも押型文系の土器片が少量出土しているが、これらは現在整理中である。この他に縄文時代前期・中期の土器も出土している。後期・晩期では、学史的にも有名な保地遺跡が挙げられる。保地遺跡は昭和40年度と平成11年度に発掘調査が実施されている。前者は縄文時代後期後半から晩期後半までの土器・石器群と、後期後半に属するとされる特殊儀礼的遺構の検出が『考古学雑誌』に報告されている（関1966）。後者については、縄文時代晩期に位置づけられる再葬墓が検出されており、中でも約19個体分の人骨が埋葬された2号墓址が目される。その他、坂城地区の込山D遺跡（30-4）から昭和初期に採集された遮光器土偶の頭部がある。

弥生時代では、中期以前の調査例がないため状況は不明である。後期後半では、平成5年度に南条地区の塚田遺跡（1-7）で発掘調査が実施され、この時期に属する竪穴住居址36棟をはじめとする遺構が検出され、土器、石器、土製品、及び鉄製品が出土している。

古墳時代では、前期古墳は確認されていないが、中期古墳には中之条地区の坂城東平1号墳・2号墳が挙げられる（註1）。これらは、平成5年度に実施された上信越自動車道建設に伴う発掘調査で、埴輪や土器などの出土品から、1号墳は5世紀第2四半期後半、2号墳は5世紀第2四半期前半に位置づけられた（若林1999）。後期古墳では、町内でいくつかの古墳群の存在が知られているが、中でも代表的なものは村上地区の福沢古墳群小野沢支群に属する御厨社古墳である。埋葬施設に千曲川水系最大級の横穴式石室を持ち、

全長11.2mを測り、勾玉や切子玉、耳環などが出土している。古墳時代後期の集落址は町内においても多く検出され、特に環状に土器が配列された祭祀遺構が検出された南条地区の青木下遺跡Ⅱ(1-8)が注目される。奈良時代・平安時代の遺跡では、中之条地区の中之条遺跡群(8)とその周辺遺跡に多くの調査例があり、この地域における奈良・平安時代の状況が徐々に解明されつつある。具体的には、寺浦遺跡(8-1)、上町遺跡(8-2)、東町遺跡(8-3)、宮上遺跡(8-5)、北川原遺跡(8-6)、豊饒堂遺跡(20)、開飲遺跡(21)で調査が実施され、古墳時代後期後半～平安時代までの集落址が判明している。また、平安時代の生産遺跡として坂城地区の土井ノ入窯跡(32)があり、瓦の生産が行われていたことが判明し、本遺跡で生産された瓦は、現在の坂城小学校がある場所に8世紀末～9世紀頃に存在していたとされる込山廃寺(54)に用いられたほか、上田市信濃国分寺・国分尼寺、千曲市正法廃寺の補修用の差し瓦として使用されていたことが判明している。

平安時代後期、寛治8年(嘉保元)(1094)に村上地区に配流されてきた源盛清が後に村上氏として勢力を持つようになり、戦国時代には村上義清が活躍するようになった。義清の頃、村上氏の居館は現在の坂城地区の満泉寺一帯に所在したとされ、その背後にそびえる葛尾山の山頂には、義清が使用した葛尾城跡(44)がある。このほか、中世の遺跡では坂城地区の観音平経塚(55)をはじめとする経塚と中之条地区の開飲製鉄遺跡(53)がある。観音平経塚は昭和54年と平成4年に調査が行われたが、平成4年の調査では、経塚の年代は14世紀第2四半期とされ、その周辺の五輪塔群の造営時期は14世紀第2四半期から16世紀前半頃に位置づけられている(若林1999)。開飲製鉄遺跡は、昭和52・53年に坂城町教育委員会によって学術調査が実施され、16世紀頃の製鉄炉址2基が確認されている。この調査は県内初の製鉄遺跡の学術調査として学史上に位置づけられるものであった。

江戸時代に入ると、現在の坂城地区を主体とする坂木村、中之条地区を主体とする中之条村には幕府の代官所が置かれ、以後明治維新まで天領として支配された。このことから、この地域を重要視していたことが看取される。代官所は最初、坂木(61)に置かれたが、明和4年(1767)に焼失し、その後、安永8年(1779)には中之条に代官所が置かれるようになった。

以上、近世までの坂城町の歴史を概略した。

註1 周知の御堂川古墳群東支群1号墳・2号墳とは異なる可能性があるため、仮称とされている。今後、正式な古墳名称の確定が必要である。

参考文献(五十音順・敬称略)

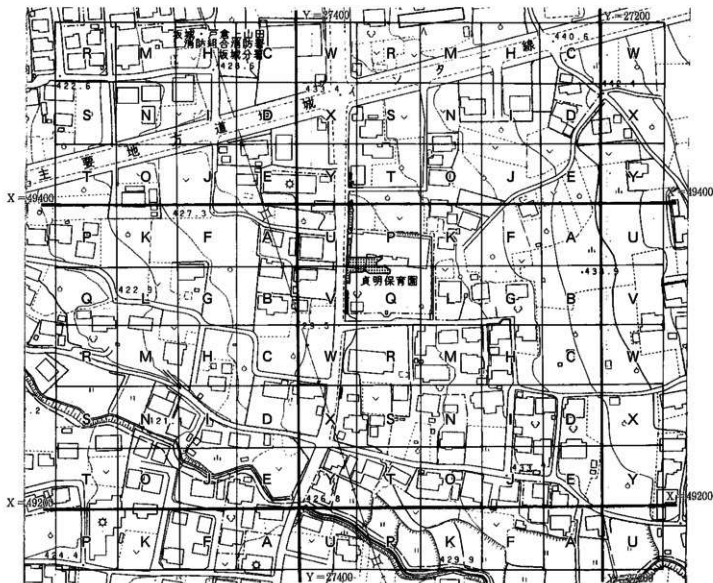
- 坂城町教育委員会 1978『開飲製鉄遺跡―第1次調査報告』1979『開飲製鉄遺跡―第2次調査報告』1993『宮上遺跡Ⅱ』1995『東真遺跡』1996『豊饒堂遺跡・上町遺跡・寺高遺跡・東町遺跡』1996『寺浦遺跡Ⅱ』2000『開飲遺跡Ⅱ』2001『宮上遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ』2002『保地遺跡Ⅱ』
- 岡 孝一 1966『長野県地科部保地遺跡発掘調査概報』『考古学雑誌』第51巻第3号
- 森嶋 勉ほか 1981『坂城町誌』中巻 歴史編(一)
- 柳沢 亮 1998『第5節 開飲遺跡』『北陸新幹線坂城文化財発掘調査報告書2』(財)長野県歴史文化財センター
- 若林 卓 1999『第9章 東平古墳群』『第11章 観音平経塚』『上信越自動車道坂城文化財発掘調査報告書21』(財)長野県歴史文化財センター

第三章 調査の概要

第1節 調査の方法

本遺跡の調査では、調査区の遺構・遺物の正確な位置を記録でき、なお、将来的に周辺で実施される遺跡の発掘調査での遺構・遺物の調査にも整合できるように、平成14年4月施行の世界測地系2000の座標軸を基にグリッドを組んだ。

グリッドについては、200m×200mの大グリッドを設け区画を行い、その中を40m×40mに25等分した中グリッドを設定(第3図)し、北東端より「A・B・C…Y」区とアルファベットの大文字で命名した。本調査ではY・P・Q・U・V・X区が発掘調査の対象グリッドである。また、その中グリッドを4m×4mの小グリッドで100区画に分割し、南北列を北から算用数字で「1・2・3…10」、東西列を東から五十音順で「あ・い・う…こ」と呼称することとした。例えば、その中の北東交点を「Oグリッド」というように命名し、調査に係るグリッドの呼称は例えば「Oあ1グリッド」とし、遺物の取り上げや遺構図の作成の基準とした。また、発掘調査における遺構の実測は、基本的に1/20を基準として簡易造り方実測にて行った。

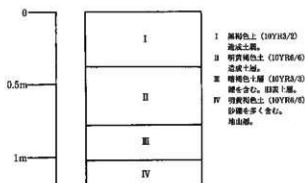


第3図 上町遺跡IV・V発掘調査区設定図(1:2,500)

第2節 基本層序

本調査区の基本層序は右図に柱状図を示したとおりである。Ⅰ層は黒褐色土層で、造成土層である。Ⅱ層は明黄褐色土層で、造成土層である。Ⅲ層は暗褐色土層で、旧表土層である。Ⅳ層は明黄褐色の砂礫を多く含む層で、地山である。

以上が本調査区の基本層序であるが、造成土層は場所によって厚さが異なった。



第4図 基本層序模式図

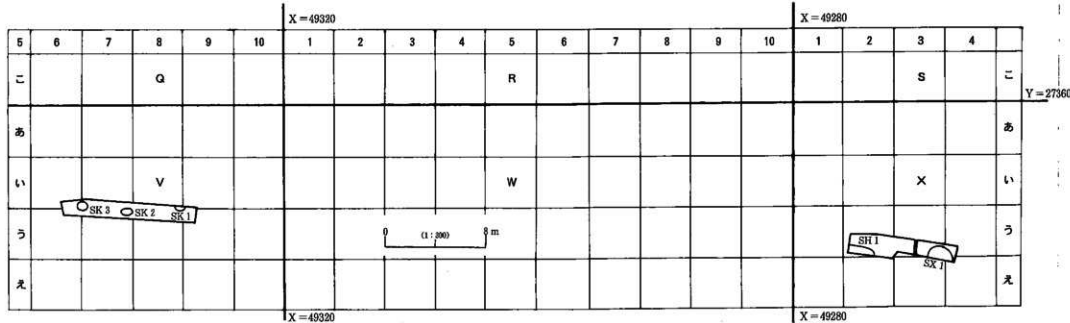
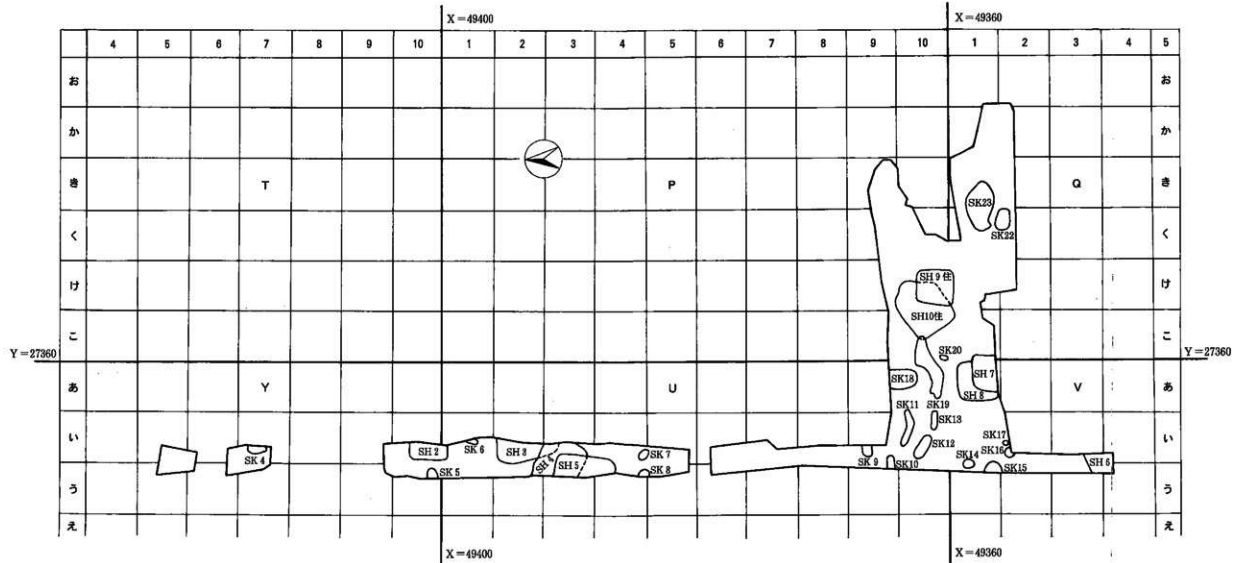
第3節 検出された遺構・遺物

本調査によって検出された遺構・遺物は以下のとおりである。
遺構)

古墳時代	竪穴住居址	2棟
奈良・平安時代	竪穴住居址	8棟
	土坑址	1基
時期不明	土坑址	21基
	不明遺構	1基

遺物)

縄文時代	石器
古墳時代	土師器・須恵器
奈良・平安時代	土師器・須恵器



第5図 上町通跡IV・V遺構配置図(1:300)

第IV章 調査の結果

第1節 竪穴住居址

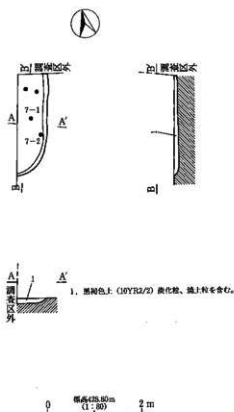
(1) 1号住居址

遺 構 (第6図)

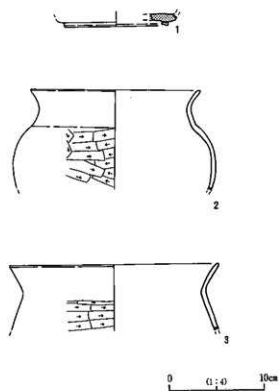
検出位置：Xう2グリッド。重複関係：北側と西側は調査区外未検出のため不明である。平面形態：住居址のほとんどが調査区外であるので詳細は不明であるが、概ね隅丸方形を呈している。主軸方位は概ねN-5°-Eを指すものと思われる。覆土：黒褐色を基調とする土層が堆積していた。カマド：今回の調査では検出されなかった。床面の状況：概ね平坦であった。地山を平坦に掘り込んで、床面を形成していた。ピット：床面及び掘り方底面において、ピットなどの掘り込みは確認されなかった。遺物出土状況：住居址の覆土上・中層からも少量は出土したが、ほとんどの遺物は下層・床面直上からの出土であった。柱穴：本住居址では支柱穴は確認できなかった。

遺 物 (第7図、第1表)

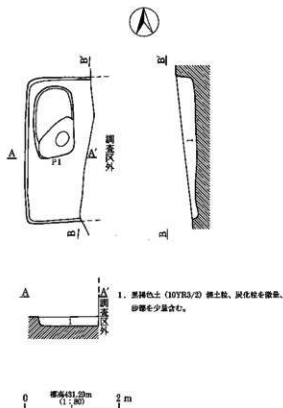
7-1は須恵器環の底部である。2・3は土師器の甕の口縁部から胴部である。2の外面には左右方向のヘラケズリが施されている。3の外面には横方向のヘラケズリが施され、頸部は「く」字状に屈曲している。時期：出土遺物や住居址の形態から古代前半頃の所産と思われる。



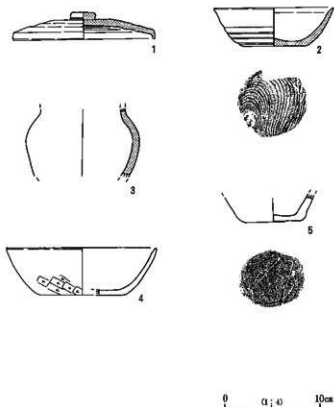
第6図 1号住居址実測図



第7図 1号住居址出土遺物実測図



第8図 2号住居址実測図



第9図 2号住居址出土遺物実測図

(2) 2号住居址

遺構 (第8図)

検出位置：Yい10、Uい1グリッド。重複関係：東側が調査区外未検出のため不明である。平面形態：調査区外未検出であるため詳細は不明であるが、概ね3.1m×3.1mの隅丸方形を呈するものと思われる。主軸方位はN-0°-Eを指す。覆土：黒褐色を基調とする土層が堆積していた。カマド：今回の調査では検出されなかった。床面の状況：概ね平坦であった。地山を掘り込んで床面を形成していた。ピット：床面において1基のピットが確認された。浅い掘り込みで、用途などは判然としない。遺物出土状況：住居址の覆土・中層からも少量は出土したが、ほとんどの遺物は下層からの出土であった。柱穴：本住居址では柱穴は確認できなかった。

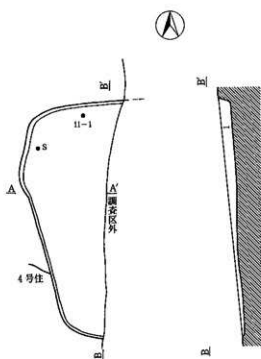
遺物 (第9図、第1表)

9-1は須恵器壺である。退化した振宝珠状ツマミが取り付け。2は須恵器環である。底面に顕著な回転糸切り痕を残す。3は須恵器の壺の胴部である。4は土師器環である。外面下部に斜め方向のヘラケズリが施されている。内面は黒色処理が施されている。5は土師器甕の底部である。底面には木葉痕を残している。時期：出土遺物や住居址の形態から平安時代前半頃の所産と思われる。

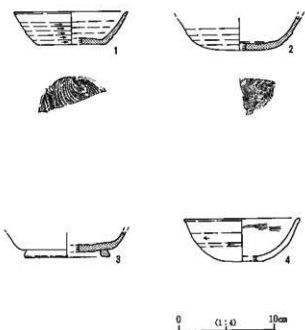
(3) 3号住居址

遺構 (第10図)

検出位置：Uい2、Uい3グリッド。重複関係：東側が調査区外未検出のため不明である。平面形態：調査区外未検出であるため詳細は不明であるが、概ね5m×5mの隅丸方形を呈するものと思われる。主軸方位



第10図 3号住居址実測図



第11図 3号住居址出土遺物実測図

1. 黒褐色土 (BFY72/2) 焼土紋、
炭化粒、砂塵を散見含む。

は $N-3^{\circ}W$ を指す。覆土：黒褐色を基調とする土層が堆積していた。カマド：今回の調査では検出されなかった。床面の状況：概ね平坦であった。地山を掘り込んで床面を形成していた。ピット：今回の調査では、床面及び掘り方底面においてピット等は確認されなかった。遺物出土状況：遺物のほとんどが下層～床面直上での出土であった。柱穴：今回の調査では主柱穴は確認できなかった。

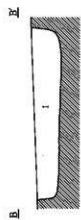
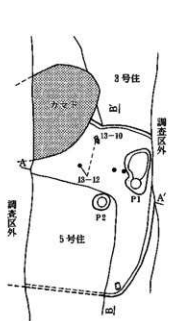
遺物 (第11図、第1表)

11-1は須恵器杯の口縁部から底部である。底部は平底で顕著な回転糸切り痕を残す。2は須恵器杯の杯部から底部である。底部はやや丸底で顕著な回転糸切り痕を残す。3は須恵器杯の底部で高台が付いている。4は土師器杯である。内面は黒色処理が施されている。時期：出土遺物や住居址の形態から奈良時代～平安時代前半の所産と思われる。

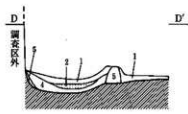
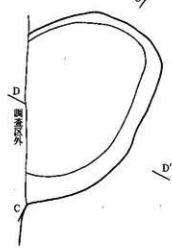
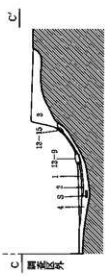
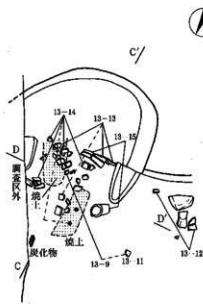
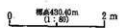
(4) 4号住居址

遺構 (第12図)

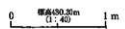
検出位置：U12、U13、U2、U3グリッド。重複関係：東側および西側が調査区外未検出のため詳細は不明である。南西側を5号住居址に切られている。平面形態：調査区外未検出のため詳細は不明であるが、概ね $3.6m \times 3.6m$ の隅丸方形を呈するものと思われる。主軸方位は $N-11^{\circ}E$ を指す。覆土：黒褐色を基調とする土層が堆積していた。カマド：住居址の北側から検出された。西側のソデは調査区外になり、



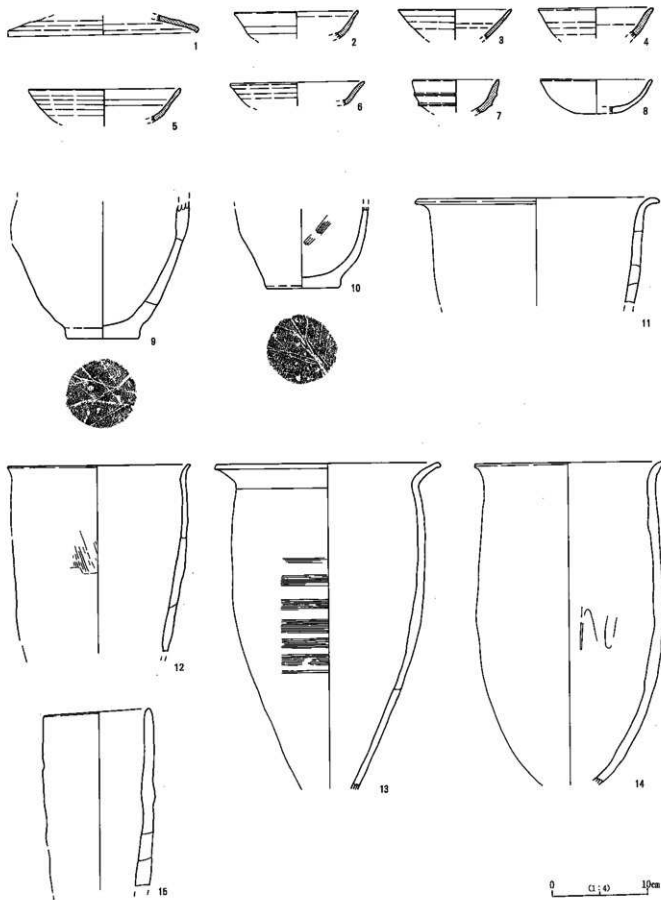
1. 黒褐色土 (10YR3/2) 炭化物、炭化殻を多数、砂礫を多く含む。



1. 黒褐色土 (10YR3/2) 炭化物、炭土殻を少量含む。埋積層。
2. 暗赤褐色土 (5YR3/2) 炭化物、炭土殻を少量含む。カマドの炭土層。
3. 黒褐色土 (10YR3/2) 炭化物、炭土殻を少量含む。埋積層。
4. 褐色土 (10YR4/4) 炭化物、炭土殻を少量含む。カマド周り方雑土。
5. 上記の黒褐色土 (10YR3/2) 部分的に被覆している。カマド跡。



第12図 4号住居址・カマド実測図



第13图 4号住居址出土遗物实测图

一部分しか検出できなかった。粘土を用いたカマドで、ソデ部の残存状況は比較的良かった。中之条遺跡群の古墳時代の住居址に見られる円筒形土製品も出土した。円筒形土製品の出土地点がカマドのソデから外れていることから、住居廃絶時にカマドが壊されたものと思われる。床面の状況：概ね平坦であった。地山を掘り込んで床面を形成していた。ピット：床面において、2基のピットが確認された。用途などは判然としない。遺物出土状況：住居址の覆土上・中層からも少量は出土したが、ほとんどの遺物は下層からの出土であった。また、カマドとその周辺からは多くの土器片が出土した。柱穴：今回の調査では主柱穴は確認できなかった。

遺物（第13図、第1表）

13-1は須恵器坏蓋である。2は須恵器坏の口縁部から坏部である。口縁部付近が若干外反している。3は須恵器坏の口縁部から坏部である。口縁部は直線的に伸びる。4は須恵器坏の口縁部から坏部である。口縁部付近が若干外反している。5は須恵器坏の口縁部から坏部である。6は須恵器坏の口縁部から坏部である。口縁部付近が若干外反している。7は須恵器高坏の坏部である。外面に2段の稜を持つ。8は土師器坏の口縁部から坏部である。内面は黒色処理が施されている。9は土師器甕の胴部から底部である。内外面ともにヘラナデが施されている。底面には木葉痕が残っている。10は土師器甕の胴部から底部である。外面は剝離が顕著であるが、内面は若干のヘラミガキが観察できる。底面には木葉痕が残っている。11は土師器甕の口縁部から胴部である。内外面ともに若干のナデ調整が観察できる。12は土師器甕の口縁部から胴部である。内外面ともに若干のナデ調整が観察できる。13は土師器甕の口縁部から胴部である。外面には横位ハケナデが、内面にはヘラナデが施されている。14は土師器甕の口縁部から胴部である。内外面ともにヘラナデが施されている。15は円筒形土製品である。内外面ともに粗い調整が施されているが、輪積みの痕跡が確認できる。時期：出土遺物や住居址の形態から古墳時代後期後半頃の所産と思われる。

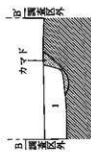
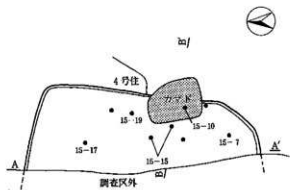
(5) 5号住居址

遺構（第14図）

検出位置：U13、U14、U3、U4グリッド。重複関係：西側が調査区外未検出のため詳細は不明である。北東側で4号住居址を切っている。平面形態：調査区外未検出のため詳細は不明であるが、概ね4.8m×4.8mの隅丸方形を呈するものと思われる。主軸方位はN-9°-Eを指す。覆土：黒褐色を基調とする土層が堆積していた。カマド：住居址の東側から検出された。ソデの残存状況は良好で、板状の石材を心材にして粘土で被覆する状況が確認できた。床面の状況：概ね平坦であった。地山を掘り込んで床面を形成していた。ピット：今回の調査では、床面及び掘り方底面においてピット等は確認されなかった。遺物出土状況：住居址の覆土上・中層からも少量は出土したが、ほとんどの遺物は下層からの出土であった。また、カマドとその周辺からは多くの土器片が出土した。柱穴：今回の調査では主柱穴は確認できなかった。

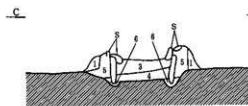
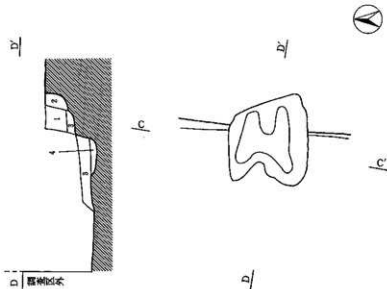
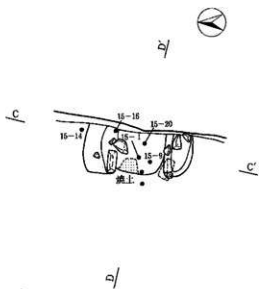
遺物（第15図、第1・2・4表）

15-1は須恵器坏蓋である。退化した擬宝珠状ツマミが取り付く。2は須恵器坏蓋である。3は須恵器坏蓋である。4は須恵器坏の口縁部から底部である。坏部外面が若干外反している。5は須恵器坏の口縁部から底部である。口縁部は直線的に開く。6は須恵器坏の口縁部から底部である。口縁部は直線的に開く。7は須恵器坏である。口縁部外面が外反している。8は須恵器坏の口縁部から底部である。9は須恵器坏の底部である。10は須恵器甕の口縁部である。外面に若干のタケキ目が観察できる。11は土師器坏の坏部である。内面は黒色処理が施されている。12は土師器甕の口縁部である。内外面ともにヘラナデが施されている。13



1. 黒褐色土 (10YR2/2) 焼土粒、炭化粒、砂礫を微量含む。

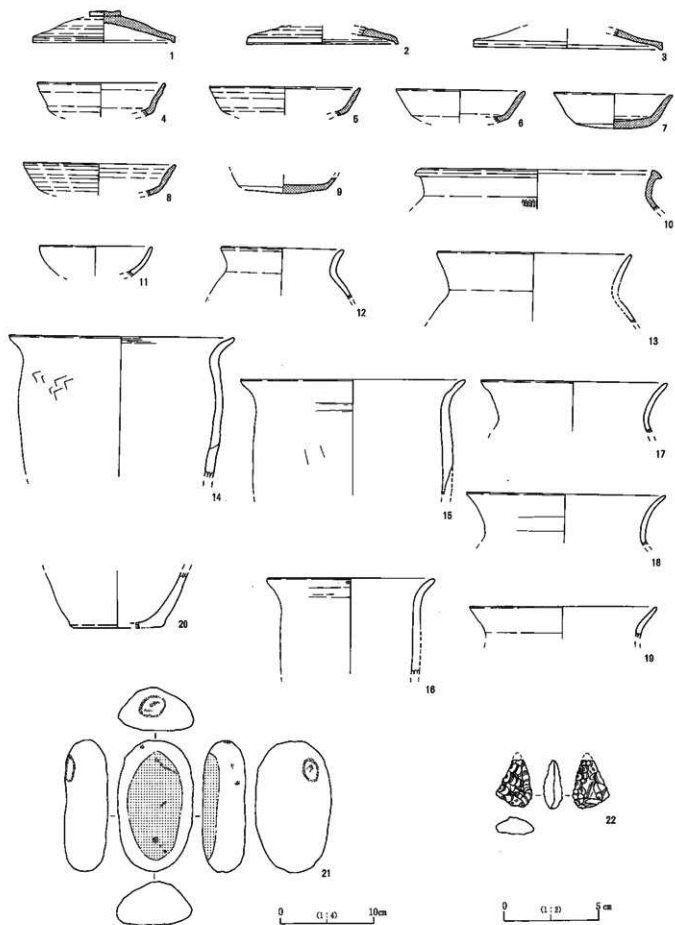
0 標高430.40m (1:80) 2m



1. 黒褐色土 (10YR2/2) 焼土粒、炭化粒を少量含む。埋藏層。
2. 黒褐色土 (10YR2/2) 炭化粒、炭土粒を微量含む。埋藏に準拠した上層。
3. におい黄褐色土 (10YR5/2) 炭化粒、焼土粒を微量含む。埋藏したカマド天井部。
4. におい赤褐色土 (5YR4/4) 炭化粒、焼土粒を主体部。カマドの焼土層。
5. 暗黄褐色土 (10YR7/6) 上層は炭焼している。カマド壁部。
6. におい黄褐色土 (10YR4/4) 部分的に炭焼している。カマド隅り方壁土。

0 標高430.10m (1:80) 1m

第14図 6号住居址・カマド実測図



第16图 6号住居址出土遗物实测图

は土師器甕の口縁部である。内外面ともにナデ調整が施されている。14は土師器甕の口縁部から胴部である。外面には縦位のヘラナデが施されている。15は土師器甕の口縁部から胴部である。内外面ともにナデ調整が施されている。16は土師器甕の口縁部である。内外面ともにナデ調整が施されている。17は土師器甕の口縁部である。内外面ともにナデ調整が施されている。18は土師器甕の口縁部である。内面は縦位ヘラナデ、外面は横位ヘラナデが施されている。19は土師器甕の口縁部から胴部である。内外面ともにヘラナデが施されている。20は土師器甕の胴部から底部である。内外面ともにヘラナデが施されている。21は礫石器である。上面に使用に際して付いたと思われる磨減痕が観察できる。22は黒耀石製石鏃の未製品である。上記2点は周囲からの流れ込みであろう。時期：出土遺物や住居の形態から平安時代前半頃の所産と思われる。

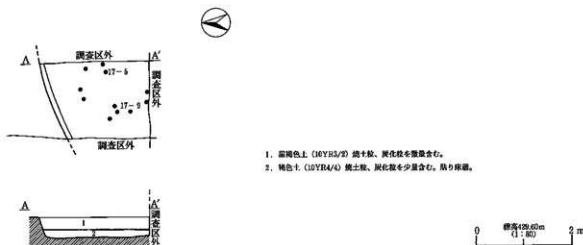
(6) 6号住居址

遺構 (第16図)

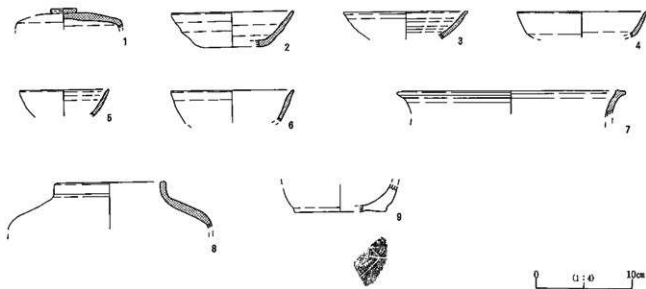
検出位置：Vい3、Vい4、Vう3、Vう4グリッド。重複関係：南側、東側および西側が調査区外未検出のため不明である。平面形態：調査区外未検出のため不明である。主軸方位も未検出部分が多いため不明である。覆土：黒褐色を基調とする土層が堆積していた。カマド：今回の調査では確認されなかった。床面の状況：概ね平坦であった。地山を掘り込んだ後に、厚さ十数センチの床土を敷き込んでいた。ピット：床面及び掘り方底面においてピット等は確認されなかった。遺物出土状況：住居址の覆土上・中・下層から偏りなく出土した。柱穴：今回の調査では主柱穴は確認できなかった。

遺物 (第17図、第2表)

17-1は須恵器坏蓋である。2は須恵器坏の口縁部から底部である。3は須恵器坏の口縁部である。4は須恵器坏の口縁部である。5は須恵器坏の口縁部である。若干内湾している。6は須恵器坏の口縁部である。7は須恵器甕の口縁部である。8は須恵器短頸壺の口縁部から胴部である。9は土師器甕の底部である。底面には木葉痕が残っている。時期：出土遺物や住居の形態から、平安時代前半頃の所産と考えられる。



第16図 6号住居址実測図



第17図 6号住居址出土遺物実測図

(7) 7号住居址

遺構 (第18図)

検出位置：Vあ1、Qこ1グリッド。重複関係：南側が調査区外未検出のため詳細は不明である。北側、西側で8号住居址を切っている。平面形態：調査区外未検出のため詳細は不明であるが、概ね3.0m×3.0mの隅丸方形を呈するものと思われる。主軸方位はN-3°-Eを指す。覆土：黒褐色を基調とする土層が堆積していた。カマド：今回の調査では確認されなかった。床面の状況：概ね平坦であった。地山を掘り込んで床面を形成していた。ピット：床面において2基のピットが確認された。P2の覆土には多くの炭化物和焼土が含まれていた。遺物出土状況：住居址の覆土中層から少量出土した。柱穴：今回の調査では主柱穴は確認できなかった。

遺物 (第19図、第2表)

19-1は須恵器環の口縁部である。2は土師器環の坏部から底部である。内面には黒色処理が施されている。時期：出土遺物や住居址の形態から古代の所産と思われる。

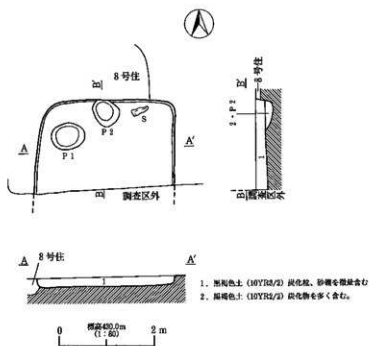
(8) 8号住居址

遺構 (第20図)

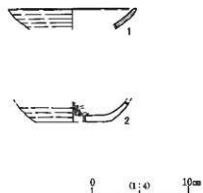
検出位置：Vあ1グリッド。重複関係：南側が7号住居址に切られている。平面形態：南側を7号住居址に切られているため詳細は不明であるが、概ね3.1m×3.1mの隅丸方形を呈するものと思われる。主軸方位はN-0°-Eを指す。覆土：黒褐色を基調とする土層が堆積していた。カマド：今回の調査では確認されなかった。床面の状況：概ね平坦であった。地山を掘り込んで床面を形成していた。ピット：床面において2基のピットが確認された。遺物出土状況：21-1が床面直上から出土したのみであった。柱穴：今回の調査では主柱穴は確認できなかった。

遺物 (第21図、第2表)

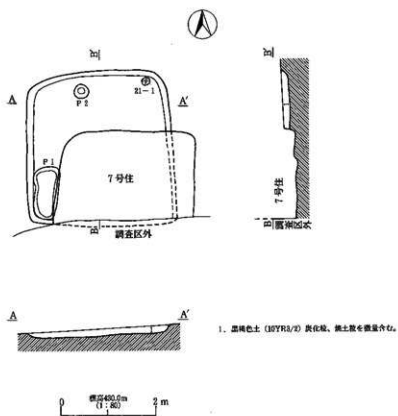
21-1は須恵器環蓋である。退化した擬宝珠状ツマミが取り付け、焼成は良好である。時期：出土遺物や住居址の形態から平安時代前半頃の所産と思われる。



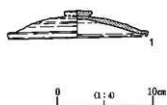
第18図 7号住居址実測図



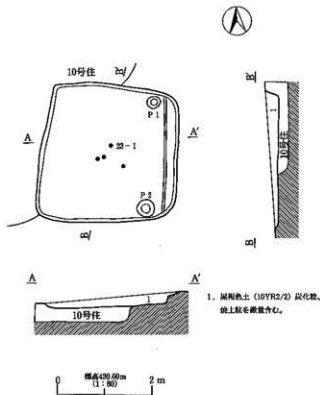
第19図 7号住居址出土遺物実測図



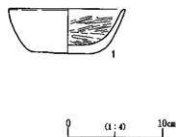
第20図 8号住居址実測図



第21図 8号住居址出土遺物実測図



第22図 9号住居址実測図



第23図 9号住居址出土遺物実測図

(9) 9号住居址

遺構 (第22図)

検出位置：Pけ10、Qけ1グリッド。重複関係：10号住居址を切っている。平面形態：概ね3.0m×2.9mの隅丸方形を呈し、主軸方位はN-12°-Eを指す。覆土：黒褐色を基調とする土層が堆積していた。カマド：今回の調査では検出されなかった。床面の状況：概ね平坦であった。地山を掘り込んで床面を形成していた。ピット：床面において、2基のピットが確認された。用途などは判然としない。遺物出土状況：住居址の覆土から少量の土師器片が出土した。柱穴：本住居址では主柱穴は確認できなかった。

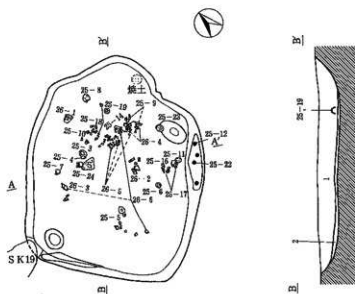
遺物 (第23図、第2表)

23-1は土師器片である。内面は黒色処理が施されている。時期：出土遺物や住居址の形態、10号住居址との切りあい関係から奈良時代から平安時代前半頃の所産と思われる。

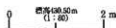
(10) 10号住居址

遺構 (第24図)

検出位置：Pけ9、Pけ10、Qけ1、Pこ10、Qこ1グリッド。重複関係：9号住居址に切られている。平面形態：概ね4.7m×3.8mの隅丸方形を呈しているものと思われる。主軸方位はN-45°-Eを指す。覆土：黒褐色を基調とする土層が堆積していた。カマド：今回の調査では検出されなかったが、北東側で張り出した部分が検出された。おそらくこの部分にカマドが設けられていたものと思われる。床面の状況：概ね平坦であった。地山を掘り込んだ後に、厚さ数センチの床土を敷きこんでいた。ピット：床面において、2基のピットが確認された。用途などは判然としない。遺物出土状況：住居址覆土中層から多くの土師器・須恵器が出土した。柱穴：本住居址では主柱穴は確認できなかった。



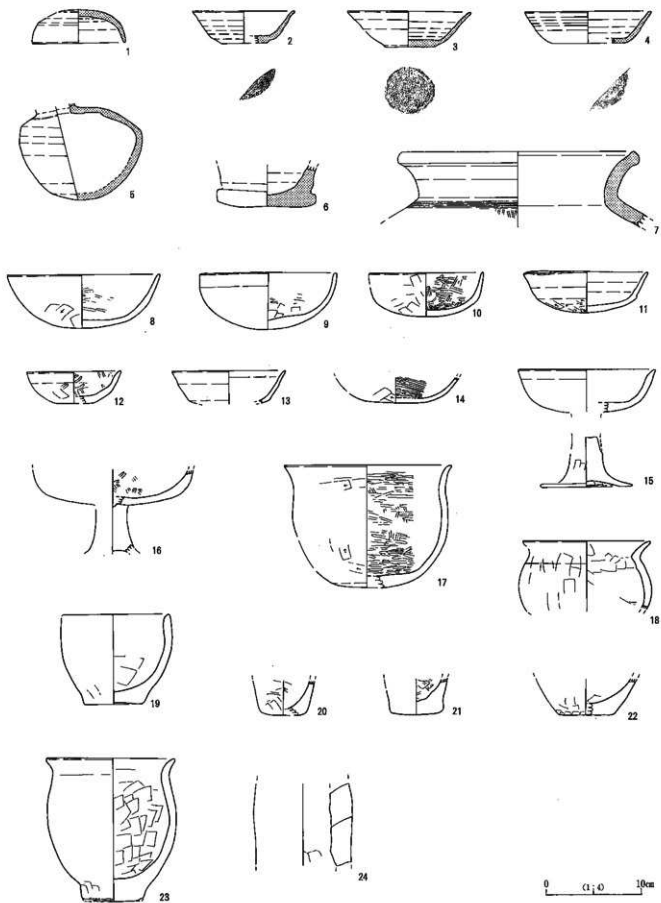
1. 黒褐色土 (GY7B/3) 焼土粒、炭化粒を少量含む。
2. 褐色土 (GY7B/4) 焼土粒、炭化粒を微量含む。胎子床層。



第24図 10号住層址変測図

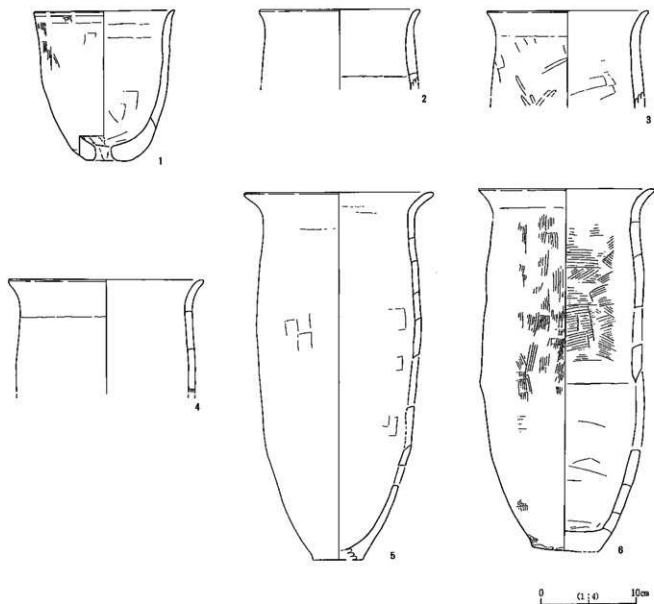
遺物 (第25・26図、第2・3表)

25-1は須恵器環蓋である。2は須恵器環の口縁部から底部である。口縁部は緩やかに外反しており、底面に回転糸切り痕を残す。3は須恵器環の口縁部から底部である。口縁部は緩やかに外反しており、底面に回転糸切り痕を残す。4は須恵器環の口縁部から底部である。口縁部は直線的に開いており、底面に回転糸切り痕を残す。5は須恵器平瓶である。頸部より上は欠損している。6は須恵器擂鉢の底部である。7は須恵器甕の口縁部である。8は土師器環である。外面下部にはヘラケズリが、内面にはミガキ調整が施されている。9は土師器環である。外面の調整は磨滅しているが、内面にはナデ・ミガキ調整が施されている。10は土師器環である。外面にはヘラケズリが、内面には黒色処理が施されている。11は土師器環である。外面下部にはヘラケズリが、内面にはナデ調整が施されている。12は土師器環である。外面にはヘラケズリが、内面には黒色処理が施されている。13は土師器環である。調整は磨滅しており不明である。14は土師器環である。外面下部にはヘラケズリが、内面にはミガキ調整が施されている。15は土師器高環である。調整は内外面ともに磨滅しており詳細は不明である。16は土師器高環の坏部から脚部である。外面の調整は磨滅して不明であるが、坏部内面には黒色処理が施されている。17は土師器鉢である。外面にはヘラケズリが、内面にはミガキ調整が施されている。18は土師器壺である。内外面ともにヘラケズリが施されている。19は土師器鉢である。小型の製品であるが、内外面ともにヘラケズリが観察できる。20は土師器甕の底部である。内外面ともにヘラケズリが施されている。21は土師器甕の底部である。外面にはナデ調整が、内面にはヘラケズリが施されている。22は土師器甕である。内外面ともに若干のヘラケズリが観察される。23は土師器甕



第26图 10号住居址出土遗物实测图(1)

である。外面にはナデ調整が、内面にはヘラケズリが施されている。24は円筒形土製品である。内外面ともに粗い調整が施されているが、輪積みの痕跡が確認できる。26-1は土師器甕である。外面にはハケメが、内面にはヘラケズリが施されている。底部に円形の穿孔が行われている。2は土師器甕の口縁部から胴部である。内外面ともに磨滅が顕著で調整は判然としない。3は土師器甕の口縁部から胴部である。内外面ともにナデ調整が施されている。4は土師器甕の口縁部から胴部である。若干磨滅しているが、内外面ともにナデ調整が観察できる。5は土師器甕である。内外面ともにヘラケズリが施されている。6は土師器甕である。外面には縦位ハケナデが施されている。内面上部には斜位ハケナデが、下部には横位のナデ調整が施されている。時期：出土遺物や住居址の形態から古墳時代後期頃の所産と思われる。



第26図 10号住居址出土遺物実測図〈2〉

第2節 土坑址

(1) 1号土坑

遺構 (第27図)

検出位置：Vい8、Vい9、Vう8、Vう9グリッド。重複関係：調査区外未検出のため不明。平面形態：調査区外未検出のため不明。断面形態：皿状を呈し、検出面からの深さは16cmである。覆土：ふい黄褐色土 (10YR5/4) の単層であった。遺物出土状況：遺物は出土しなかった。時期：帰属時期は不明である。

(2) 2号土坑

遺構 (第27図)

検出位置：Vう7グリッド。重複関係：なし。平面形態：長軸約0.8m、短軸約0.6mの楕円形を呈し、主軸方位はN-0°-Eを指す。断面形態：概ね逆台形を呈し、検出面からの深さは約20cmを測る。覆土：暗褐色土 (10YR3/3) の単層であった。遺物出土状況：遺物は出土しなかった。時期：帰属時期は不明である。

(3) 3号土坑

遺構 (第27図)

検出位置：Vい6、Vい7、Vう6、Vう7グリッド。重複関係：なし。平面形態：長軸約0.9m、短軸約0.7mの楕円形を呈し、主軸方位はN-2°-Eを指す。断面形態：逆台形を呈し、検出面からの深さは24cmを測る。覆土：暗褐色土 (10YR3/3) の単層であった。遺物出土状況：遺物は出土しなかった。時期：帰属時期は不明である。

(4) 4号土坑

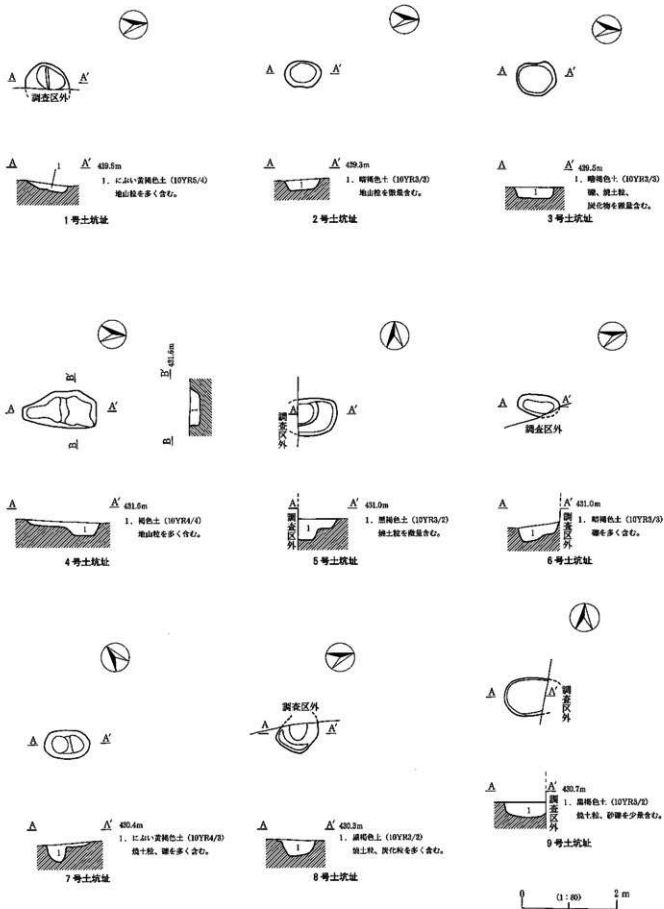
遺構 (第27図)

検出位置：Yい7グリッド。重複関係：なし。平面形態：長軸約1.6m、短軸約0.8mの楕円形を呈し、主軸方位はN-6°-Eを指す。断面形態：2段に掘り込まれた逆台形を呈し、検出面からの深さは約26cmを測る。覆土：褐色土 (10YR4/4) の単層であった。遺物出土状況：遺物は出土しなかった。時期：帰属時期は不明である。

(5) 5号土坑

遺構 (第27図)

検出位置：Yい7グリッド。重複関係：調査区外未検出のため不明。平面形態：調査区外未検出のため詳細は不明であるが、短軸約80cmの楕円形を呈し、主軸方位はN-90°-Eを指すものと思われる。断面形態：2段に掘り込まれた逆台形を呈し、検出面からの深さは45cmである。覆土：黒褐色土 (10YR3/2) の単層であった。遺物出土状況：遺物は出土しなかった。時期：帰属時期は不明である。



第27図 土坑址実測図(1)

(6) 6号土坑

遺構 (第27図)

検出位置：Uい1グリッド。重複関係：調査区外未検出のため不明。平面形態：調査区外未検出のため詳細は不明であるが、長軸約90cm、短軸約45cmの楕円形を呈し、主軸方位はN-18°-Eを指す。断面形態：2段に掘り込まれた逆台形を呈し、検出面からの深さは40cmである。覆土：暗褐色土(10YR3/3)の単層であった。遺物出土状況：遺物は出土しなかった。時期：帰属時期は不明である。

(7) 7号土坑

遺構 (第27図)

検出位置：Uい4、Uい5グリッド。重複関係：なし。平面形態：長軸約95cm、短軸約55cmの楕円形を呈し、主軸方位はN-58°-Eを指す。断面形態：2段に掘り込まれた椀状を呈し、検出面からの深さは50cmである。覆土：にぶい黄褐色土(10YR4/3)の単層であった。遺物出土状況：遺物は出土しなかった。時期：帰属時期は不明である。

(8) 8号土坑

遺構 (第27図)

検出位置：Uう4、Uう5グリッド。重複関係：調査区外未検出のため不明。平面形態：調査区外未検出のため不明。断面形態：2段に掘り込まれた椀状を呈し、検出面からの深さは35cmである。覆土：黒褐色土(10YR3/2)の単層であった。遺物出土状況：遺物は出土しなかった。時期：帰属時期は不明である。

(9) 9号土坑

遺構 (第27図)

検出位置：Uい9グリッド。重複関係：調査区外未検出のため不明。平面形態：調査区外未検出のため詳細は不明であるが、短軸約80cmの楕円形を呈し、主軸方位はN-84°-Eを指すものと思われる。断面形態：逆台形を呈し、検出面からの深さは約30cmである。覆土：黒褐色土(10YR3/2)の単層であった。遺物出土状況：遺物は出土しなかった。時期：帰属時期は不明である。

(10) 10号土坑

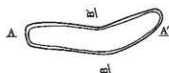
遺構 (第28図)

検出位置：Uい9、Uう9グリッド。重複関係：調査区外未検出のため不明。平面形態：調査区外未検出のため不明。断面形態：椀状を呈し、検出面からの深さは約40cmである。覆土：暗褐色土(10YR3/3)の単層であった。遺物出土状況：遺物は出土しなかった。時期：帰属時期は不明である。

(11) 11号土坑

遺構 (第28図)

検出位置：Uい10、Uあ10グリッド。重複関係：なし。平面形態：長軸約3.0m、短軸約0.6mの「く」字状を呈し、主軸方位はN-84°-Eを指す。断面形態：逆台形を呈し、検出面からの深さは32cmである。覆土：黒褐色土(10YR3/2)の単層であった。遺物出土状況：遺物は出土しなかった。時期：帰属時期は不明である。



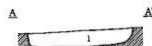
10号土坑址

1. 暗褐色土 (10YR3/3)
炭化粒を微量含む。



11号土坑址

1. 暗褐色土 (10YR3/2)
炭化粒を少量、炭上粒を微量含む。



12号土坑址

1. 暗褐色土 (10YR3/2)
炭化粒を少量、炭を多く含む。



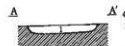
13号土坑址

1. 暗褐色土 (10YR4/1)
炭土粒を微量、砂礫を多く含む。



14号土坑址

1. 暗褐色土 (10YR3/2)
地山ブロックを多く含む。



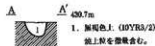
15号土坑址

1. 灰黄褐色土 (10YR4/7)
地山ブロック、炭を多く含む。



16号土坑址

1. 灰黄褐色土 (10YR4/3)
炭化粒を微量含む。



17号土坑址

1. 暗褐色土 (10YR3/2)
炭土粒を微量含む。

0 (1:80) 2 m

第28図 土坑址実測図〈2〉

ある。

(12) 12号土坑

遺構 (第28図)

検出位置：Uい10グリッド。重複関係：なし。平面形態：長軸約2.2m、短軸約0.9mの楕円形を呈し、主軸方位はN-63°-Eを指す。断面形態：逆台形を呈し、検出面からの深さは32mである。覆土：黒褐色土 (10YR3/2) の単層であった。遺物出土状況：遺物は出土しなかった。時期：帰属時期は不明である。

(13) 13号土坑

遺構 (第28図)

検出位置：Uい10グリッド。重複関係：なし。平面形態：長軸約1.6m、短軸約0.55mの楕円形を呈し、主軸方位はN-90°-Eを指す。断面形態：逆台形を呈し、検出面からの深さは約24cmである。覆土：にぶい褐灰色土 (10YR4/1) の単層であった。遺物出土状況：遺物は出土しなかった。時期：帰属時期は不明である。

(14) 14号土坑

遺構 (第28図)

検出位置：Vう1、Vい1グリッド。重複関係：なし。平面形態：長軸約0.83m、短軸約0.8mの円形を呈し、主軸方位はN-0°-Eを指す。断面形態：緩やかな逆台形を呈し、検出面からの深さは約18cmである。覆土：黒褐色土 (10YR3/2) の単層であった。遺物出土状況：遺物は出土しなかった。時期：帰属時期は不明である。

(15) 15号土坑

遺構 (第28図)

検出位置：Vう1、Vう2グリッド。重複関係：調査区外未検出のため不明。平面形態：調査区外未検出のため不明。断面形態：緩やかな逆台形を呈し、検出面からの深さは約18cmである。覆土：灰黄褐色土 (10YR4/2) の単層であった。遺物出土状況：遺物は出土しなかった。時期：帰属時期は不明である。

(16) 16号土坑

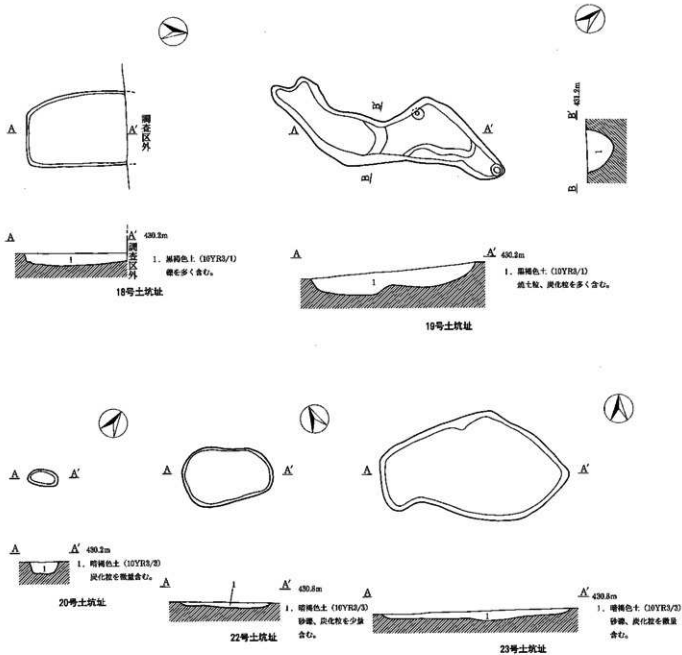
遺構 (第28図)

検出位置：Vい2グリッド。重複関係：調査区外未検出のため不明。平面形態：調査区外未検出のため不明。断面形態：皿状を呈し、検出面からの深さは約18cmである。覆土：にぶい黄褐色土 (10YR4/3) の単層であった。遺物出土状況：遺物は出土しなかった。時期：帰属時期は不明である。

(17) 17号土坑

遺構 (第28図)

検出位置：Vい2グリッド。重複関係：なし。平面形態：長軸約0.44m、短軸約0.36mの円形を呈し、主軸方位はN-85°-Eを指す。断面形態：やや深い碗状を呈し、検出面からの深さは約32cmである。覆土：黒



第29图 土坑址实测图 (3)

0 (1:80) 2m



0 (1:4) 10cm

第30图 23号土坑址出土遗物实测图

褐色土（10YR3/2）の単層であった。遺物出土状況：遺物は出土しなかった。時期：帰属時期は不明である。

(18) 18号土坑

遺構（第29図）

検出位置：Uあ10、Uあ9グリッド。重複関係：調査区外未検出のため不明。平面形態：調査区外未検出のため不明。断面形態：緩やかな逆台形を呈し、検出面からの深さは約25cmである。覆土：黒褐色土（10YR3/1）の単層であった。遺物出土状況：遺物は出土しなかった。時期：帰属時期は不明である。

(19) 19号土坑

遺構（第29図）

検出位置：Uあ10、Pこ10グリッド。重複関係：10号住居址を切る。平面形態：長軸約5.2m、短軸約1.42mのいびつな形状を呈し、主軸方位はN-75°-Eを指す。断面形態：2段に掘り込まれた皿状を呈し、検出面からの深さは約46cmである。覆土：黒褐色土（10YR3/1）の単層であった。遺物出土状況：遺物は出土しなかった。時期：帰属時期は不明である。

(20) 20号土坑

遺構（第29図）

検出位置：Pこ10グリッド。重複関係：なし。平面形態：長軸約0.6m、短軸約0.36mの楕円形を呈し、主軸方位はN-43°-Eを指す。断面形態：逆台形を呈し、検出面からの深さは約27cmである。覆土：暗褐色土（10YR3/3）の単層であった。遺物出土状況：遺物は出土しなかった。時期：帰属時期は不明である。

(21) 22号土坑

遺構（第29図）

検出位置：Qく1、Qく2グリッド。重複関係：なし。平面形態：長軸約1.9m、短軸約1.14mの楕円形を呈し、主軸方位はN-67°-Eを指す。断面形態：浅い皿状を呈し、検出面からの深さは10cmである。覆土：暗褐色土（10YR3/3）の単層であった。遺物出土状況：遺物は出土しなかった。時期：帰属時期は不明である。

(22) 23号土坑

遺構（第29図）

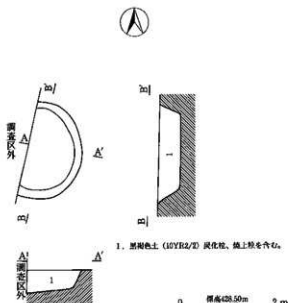
検出位置：Qく1、Qき1グリッド。重複関係：なし。平面形態：長軸約4.0m、短軸約2.26mのややいびつな楕円形を呈し、主軸方位はN-90°-Eを指す。断面形態：浅い皿状を呈し、検出面からの深さは約20cmである。覆土：暗褐色土（10YR3/3）の単層であった。遺物出土状況：覆土中から須恵器が2点出土した。遺物（第30図、第3表）：30-1・2は須恵器坏の底部片である。時期：出土遺物から古代の所産と考えられる。

第3節 その他の遺構・遺物

(1) 1号不明遺構

遺構 (第31図)

検出位置：Xう4、Xう3、Xえ4、Xえ3グリッド。重複関係：調査区外未検出のため不明。平面形態：調査区外未検出のため不明。断面形態：逆台形を呈し、検出面からの深さは約48cmである。覆土：黒褐色土(10YR2/2)の単層であった。遺物出土状況：遺物は出土しなかった。時期：縄属時期は不明である。



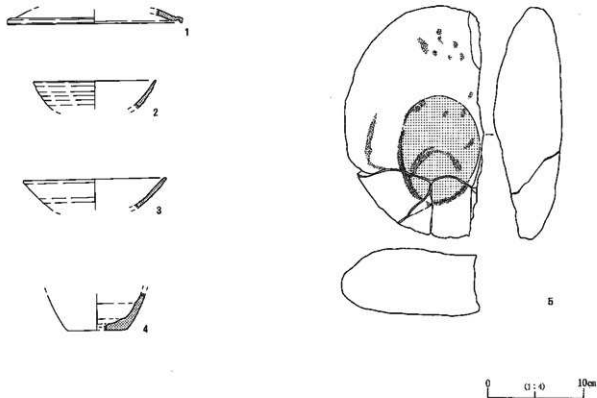
1. 黒褐色土(10YR2/2) 炭化程、焼土層を含む。

第31図 1号不明遺構実測図

(2) 遺構外出土遺物

遺物 (第32図、第3・4表)

32-1は須恵器環蓋である。2は須恵器環である。3は須恵器環である。4は須恵器壺の底部である。5は礫石器である。上面が部分的に磨滅している。



第32図 遺構外出土遺物実測図

第1表 掲載土器類一覧表

〈 〉 推定値 () 残存値を示す。

掲載No.	遺跡名	発掘No.	発掘層	種類	形状・分類	残存状況	口径 (cm)			装 飾 ・ 文 様		色 調	備 考
							口径	底径	底径	外 面	内 面		
7-1	SH1	2	2	環状器	肩付杯	底径1/3	—	(11.0)	—	ロクロコナデ	ロクロコナデ	外内面 SYB/灰色	
7-2	SH1	1	1	土師器	甕	口→底径1/3	17.8	(18.0)	—	ヘラケズリ	ヘラナデ	外内面 SYB/4C:J1-黄褐色	
7-3	SH1	4	4	土師器	甕	口→底径1/3	(22.0)	(7.0)	—	ヘラケズリ	ヘラナデ	外内面 SYB/6:黄褐色	
9-1	SH2	2	環状器	環	口径1/4	(15.0)	2.8	—	ヘラナデ	ヘラナデ	外内面 T.SYB/4C:J1-黄褐色	底面陥凹あり	
9-2	SH2	1	環状器	環	口→底径2/3	13.5	4.0	7.0	ヘラナデ	ヘラナデ	外内面 SYG/1:灰色	底面陥凹あり	
9-3	SH2	3	環状器	壺	口→底径1/4	—	(7.2)	—	ヘラナデ	ヘラナデ	外内面 T.SY4/1:灰色		
9-4	SH2	4	土師器	甕	口→底径1/4	(16.0)	5.0	9.0	ヘラケズリ	黒色胎土 ヘラミゴキ	外内面 T.SYB/6:黄褐色 内面 SYG/6:黄褐色		
9-5	SH2	5	土師器	甕	底径	—	(3.0)	6.0	ヘラナデ	ヘラナデ	外内面 SYG/3:黄褐色	底面木炭痕	
11-1	SH3	1	1	環状器	環	口→底径1/3	(16.0)	3.4	(7.0)	ロクロコナデ	ロクロコナデ	外内面 SYB/2G:J1-黄褐色	底面陥凹あり
11-2	SH3	3	3	環状器	環	口→底径1/4	—	(8.4)	—	ロクロコナデ	ロクロコナデ	外内面 T.SYB/2:黄褐色	底面陥凹あり
11-3	SH3	4	環状器	高台付杯	口→底径1/4	—	(2.5)	(8.0)	ロクロコナデ	ロクロコナデ	外内面 SYB/1:灰色		
11-4	SH3	6	土師器	甕	口→底径1/3	(12.0)	6.5	(4.5)	ロクロコナデ	黄色胎土 ヘラミゴキ	外内面 T.SYB/6:4C:J1-黄褐色 内面 SYG/2:黄褐色		
13-1	SH4	24	環状器	環	口→1/5	(20.0)	(2.0)	—	ロクロコナデ	ロクロコナデ	外内面 T.SYB/2:黄褐色 内面 SYG/3:黄褐色		
13-2	SH4	29	環状器	環	口→底径1/3	(13.0)	(3.0)	—	ロクロコナデ	ロクロコナデ	外内面 SYB/1:灰色		
13-3	SH4	27	環状器	環	口→底径1/3	(13.0)	(3.0)	—	ロクロコナデ	ロクロコナデ	外内面 SYG/1:灰色		
13-4	SH4	26	環状器	環	口→底径1/3	(13.0)	(3.0)	—	ロクロコナデ	ロクロコナデ	外内面 SYB/1:灰色		
13-5	SH4	25	環状器	環	口→底径1/5	(16.5)	(3.0)	—	ロクロコナデ	ロクロコナデ	外内面 SYG/1:灰色		
13-6	SH4	28	環状器	環	口→底径1/3	(14.0)	(3.5)	—	ロクロコナデ	ロクロコナデ	外内面 NB/1:灰色		
13-7	SH4	26-1	環状器	高杯	口径	(8.0)	(3.5)	—	ロクロコナデ	ロクロコナデ	外内面 SYR4/2:黄褐色		
13-8	SH4	23	土師器	甕	口→底径1/4	(11.7)	3.5	(5.0)	ヘラミゴキ	黄色胎土 ヘラミゴキ	外内面 SYR5/4C:J1-黄褐色 内面 SYG/6:黄褐色		
13-9	SH4	9	9	土師器	甕	口→底径	—	(14.0)	7.4	ナメヘラナデ	ヨロヘラナデ	外内面 SYB/6:4C:J1-黄褐色	底面木炭痕
13-10	SH4	5	5	土師器	甕	口→底径	—	(8.3)	7.5	裏面漆塗施す	ヘラミゴキ	外 T.SYB/6:4C:J1-黄褐色 内面 T.SYB/6:4C:J1-黄褐色	底面木炭痕
13-11	SH4	10	10	土師器	甕	口→底径	(12.0)	(12.0)	—	ヘラナデ	ヘラナデ	外内面 T.SYB/6:4C:J1-黄褐色	
13-12	SH4	4	4	土師器	甕	口→底径1/2	19.3	(18.5)	—	ヘラナデ	ヘラナデ、ヘラナデ	外内面 SYB/5:4C:J1-黄褐色	
13-13	SH4	12	12	土師器	甕	口→底径	(20.0)	(24.5)	—	ヘラナデ	ヘラナデ	外内面 T.SYB/6:4C:J1-黄褐色	
13-14	SH4	6	6	土師器	甕	口→底径	(20.0)	(20.0)	—	ヘラナデ	ヘラナデ	外内面 SYB/6:黄褐色	
13-15	SH4	8	8	土師器	肩付杯	口→底径	11.0	(11.7)	—	ナメナデ	ヘラナデ	外内面 SYB/6:4C:J1-黄褐色	
13-1	SH5	14	14	環状器	環	口径	(4.0)	(5.0)	—	輪転ヘラケズリ	ロクロコナデ	外内面 SYV4/1:グリーゼ灰色	底面陥凹あり
13-2	SH5	15	環状器	環	口径	1/3	(16.0)	(1.7)	—	ロクロコナデ	ロクロコナデ	外 T.SYB/4/2:黄褐色 内 SYB/6:黄褐色 裏面 SYB/4/4:黄褐色	
13-3	SH5	24	環状器	環	口径	1/3	(18.0)	(1.1)	—	ロクロコナデ	ロクロコナデ	外内面 SYV4/1:灰色	
13-4	SH5	22	環状器	環	口径	(13.0)	(3.0)	—	ロクロコナデ	ロクロコナデ	外内面 SYV4/1:グリーゼ灰色 内 T.SYV4/4:グリーゼ灰色		
13-5	SH5	23	環状器	環	口径	(16.0)	(4.0)	—	ロクロコナデ	ロクロコナデ	外内面 SYR4/4:黄褐色		
13-6	SH5	21	環状器	環	口径	(15.0)	(3.0)	—	ロクロコナデ	ロクロコナデ	外内面 SYV4/1:グリーゼ灰色 内 T.SYV4/4:グリーゼ灰色		
13-7	SH5	8	環状器	杯	口→底径3/4	12.4	3.7	7.8	ロクロコナデ 裏面ヘラケズリ	ロクロコナデ	外内面 SBG4/1:黄褐色		
13-8	SH5	30	環状器	杯	口径	(16.1)	(3.0)	—	ロクロコナデ	ロクロコナデ	外内面 SYR4/2:黄褐色		
13-9	SH5	10	環状器	杯	口径	—	(1.0)	9.0	裏面ヘラケズリ	ロクロコナデ	外内面 SYV4/1:グリーゼ灰色		
13-10	SH5	6	環状器	杯	口径	(24.1)	(4.1)	—	ナメナデ ロクロコナデ	ロクロコナデ	外内面 SYV4/1:グリーゼ灰色 内 T.SYV4/4:グリーゼ灰色		
13-11	SH5	19	土師器	甕	口径	(11.0)	(2.0)	—	ヘラナデ	黄色胎土 ヘラミゴキ	外内面 SYB/6:4C:J1-黄褐色 内 SYG/1:灰色		

第2表 掲載土器類表

〈 〉 推定値 () 残存値を示す。

掲載No.	遺跡名	発掘No.	発掘No.	種別	器種分類	器形式	口径 (cm)			器 蓋・文 様		色 調	備 考	
							口内	口外	底径	外 面	内 面			
15-13	SH5		18	土師器	甕	口縁部	(12.0)	(8.0)	—	ヘラナデ	ナデヘラナデ	外内面) 7.5YR/3(2.0)-褐色		
15-13	SH5		26	土師器	甕	口縁部	(9.0)	(7.2)	—	ナデ	ヘラナデ	外内面) 7.5YR/4(2.0)-褐色		
15-14	SH5	16	16	土師器	甕	口一底部	(13.5)	(4.7)	—	ヘラナデ	ヘラナデ	外) 5YR/4(2.0)-褐色 内面) 10YR/2(2.0)-黄褐色		
15-15	SH5	4	4	土師器	甕	口一底部	(13.0)	(11.2)	—	ナデ	ヘラナデ	外内面) 5YR/3(2.0)-褐色 内) 5YR/5(2.0)-黄褐色		
15-16	SH5	15	15	土師器	甕	口一底部	(17.0)	(10.1)	—	ナデ	ヘラナデ	外内面) 5YR/4(2.0)-褐色 内) 5YR/5(2.0)-黄褐色		
15-17	SH5	1	1	土師器	甕	口縁部	(18.0)	(5.2)	—	ナデ	ヘラナデ	外) 7.5YR/4(2.0)-褐色 内面) 7.5YR/5(2.0)-褐色		
15-18	SH5		17	土師器	甕	口縁部	(10.5)	(5.1)	—	ヘラナデ	ヘラナデ	外内面) 7.5YR/4(2.0)-褐色		
15-19	SH5	3	3	土師器	甕	口縁部	(19.0)	(3.7)	—	ナデ	ヘラナデ	外内面) 7.5YR/3(2.0)		
15-20	SH5	11	11	土師器	甕	口一底部	—	(5.0)	(3.2)	ナデ	ヘラナデ	外) 7.5YR/4(2.0)-褐色 内面) 10YR/2(2.0)-黄褐色		
17-1	SH5		12	灰土器	埴輪	1/3	(11.0)	(2.1)	—	黒線ヘラナデ	ロクロコナデ	外) 10Y5/4(2.0) 内) 7.5Y/2(2.0)-ブリーチ	黒線輪状つまみ	
17-2	SH5		13	灰土器	埴輪	口一底部 1/4	(12.0)	(3.7)	—	ロクロコナデ	ロクロコナデ	外内面) 7.5Y/2(2.0)-ブリーチ		
17-3	SH5		16	灰土器	埴輪	口縁部	(13.0)	(3.0)	—	ロクロコナデ	ロクロコナデ	外内面) 10Y5/1(2.0)-ブリーチ		
17-4	SH5		15	灰土器	埴輪	口縁部	(13.0)	(3.0)	—	ロクロコナデ	ロクロコナデ	外内面) 10Y5/4(2.0)黄褐色		
17-5	SH5	5	5	灰土器	埴輪	口縁部	(8.0)	(3.0)	—	ロクロコナデ	ロクロコナデ	外内面) 10Y5/1(2.0)-ブリーチ		
17-6	SH5		14	灰土器	埴輪	口縁部	(12.0)	(3.0)	—	ロクロコナデ	ロクロコナデ	外) 7.5Y/4(2.0)黄褐色 内面) 10Y5/1(2.0)-ブリーチ		
17-7	SH5		17	灰土器	埴輪	口縁部	(9.0)	(2.4)	—	ロクロコナデ	ロクロコナデ	外内面) 5YR/4(2.0)-黄褐色 内) 10YR/2(2.0)-黄褐色		
17-8	SH5		18	灰土器	埴輪	口縁部	(11.7)	(4.9)	—	黒線輪	ロクロコナデ	外) 7.5Y/3(2.0) 内) 10YR/2(2.0)-黄褐色	内面一筋と外周に 黒線輪状	
17-9	SH5	10	10	土師器	甕	口一底部 1/2	—	(2.0)	(0.0)	ナデ	ナデ	外) 10Y5/4(2.0) 内) 10YR/2(2.0)-黄褐色	底面木炭痕	
19-1	SH7		5	磁器	埴輪	口縁部	(12.0)	(3.2)	—	ロクロコナデ	ロクロコナデ	外内面) 5Y/2(2.0)		
19-2	SH7		1	土師器	甕	底面	—	(1.1)	(0.0)	ロクロコナデ	ロクロコナデ	褐色 ヘラナデ	外内面) 7.5YR/3(2.0) 内) 10YR/2(2.0)-黄褐色	
19-4	SH9	1	1	磁器	埴輪	口縁部	14.5	2.0	—	ロクロコナデ	ロクロコナデ	外内面) 5Y7/1(2.0)白色	黒線輪状つまみ	
19-1	SH9	1	1	土師器	甕	口一底部 2/3	12.1	4.7	0.0	ヘラナデ	ヘラナデ	外内面) 10YR/4(2.0)-黄褐色 内) 7.5Y/1(2.0)		
19-1	SH10	34	34	灰土器	埴輪	口一底部 2/3	10.0	3.5	—	ロクロコナデ	ロクロコナデ	外内面) 2.5Y/5(2.0)灰色		
19-2	SH10		35	灰土器	埴輪	口一底部 1/5	15.5	3.4	4.5	ロクロコナデ	ロクロコナデ	外内面) 2.5Y/5(2.0)灰色	底面木炭痕有り	
19-3	SH10	18	18	磁器	埴輪	口一底部 2/5	(12.0)	2.8	5.3	ロクロコナデ	ロクロコナデ	外内面) 2.5Y7/1(2.0)白色 口縁部) 7.5YR/4(2.0)-褐色	底面木炭痕有り	
19-4	SH10	19	19	磁器	埴輪	口一底部 1/4	(12.2)	4.4	(2.0)	ロクロコナデ	ロクロコナデ	外内面) 2.5Y/5(2.0)灰色	底面木炭痕有り	
19-5	SH10	11	11	灰土器	埴輪	口一底部 1/2	—	(10.0)	4.0	ナデ	ナデ	外内面) 5Y/4(2.0)		
19-6	SH10	9	9	灰土器	埴輪	底面	—	(4.5)	10.2	ロクロコナデ	ロクロコナデ	外) 5Y/4(2.0) 内) 7.5Y/2(2.0)-黄褐色		
19-7	SH10	17	17	灰土器	埴輪	口縁部 1/6	(24.0)	(3.0)	—	ロクロコナデ 黒線	黒線 自然輪、タタキ	内面 ロクロコナデ	外) 5Y/4(2.0) 内) 5Y/3(2.0) 底) 10YR/2(2.0)-黄褐色	
19-8	SH10	20	20	土師器	甕	4/5	15.2	4.5	4.0	ヘラナデ 下部) ヘラナデ	ヘラナデ	外内面) 7.5YR/4(2.0)		
19-9	SH10	29	29	土師器	甕	口縁部	14.5	5.1	4.0	ヘラナデ 縁線している	ヘラナデ ・ヒギキ	外内面) 7.5YR/3(2.0) 内) 7.5YR/4(2.0)		
19-10	SH10	33	33	土師器	甕	口一底部 2/3	(12.0)	4.8	4.0	ヘラナデ	黒色 ヘラナデ	外内面) 10YR/2(2.0)-黄褐色 内) 10YR/2(2.0)-黄褐色		
19-11	SH10	5	5	土師器	甕	底面	11.0	4.4	10.8	ロクロコナデ	ロクロコナデ	外内面) 5YR/5(2.0)黄褐色		
19-12	SH10	1	1	土師器	甕	口一底部 1/4	(10.0)	3.4	(4.0)	ヘラナデ	黒色 ヘラナデ	外内面) 10YR/2(2.0)-黄褐色 内) 7.5YR/2(2.0)		
19-13	SH10	36	36	土師器	甕	口縁部 1/6	(12.0)	(3.0)	—	ロクロコナデ	縁線している	外内面) 5YR/4(2.0) 内) 5YR/6(2.0)		
19-14	SH10	24	24	土師器	甕	底面	—	(3.7)	—	ヘラナデ	黒色 ヘラナデ	外内面) 10YR/4(2.0) 内) 10YR/2(2.0)		

第3表 掲載土器観察表 () 推定値 () 残存値を示す。

図録 No	遺跡名	発掘 No	層位 No	種類	形状 分類	残存度	位置 (m)			面 積・文 様		色 調	備 考
							口徑	底高	底径	外 径	内 径		
IS-15	SH10	27	土師器	高杯	付帯/2 筒形	04.0	(4.5)	—	厚縁	厚縁	外) 5YR5/4Cに赤い 内面) 7.5YR6/2黄褐色		
					筒形	—	(5.4)	(9.0)	ヘラナデ	ヘラナデ	外内面) 7.5YR5/2黄褐色		
IS-16	SH10	14	土師器	高杯	口~底部 1/4	—	(9.0)	—	厚縁して不明	坏割面は他様、ヘラナデナ			
IS-17	SH10	6	土師器	鉢	口~底部 4/5	17.8	13.0	8.0	ヘラナズリ	ヘラナズリ	外内面) 7.5YR6/4Cに赤い 褐色		
IS-18	SH10	23	土師器	壺	口~ 胴上部	(15.0)	(7.5)	—	口縁部) ココナデ 胴~胴部) タテ方向のヘラナズリ	ココ方向のヘラナズリ	外内面) 7.5YR5/9黄褐色		
IS-19	SH10	28	土師器	鉢	口部完整	11.2	9.5	6.5	タテ方向のヘラナデ	ヘラナデ	外面) 5YR4/6赤褐色 内) 7.5YR3/2黄褐色		
IS-20	SH10	40	土師器	甕	底部/2	—	(3.7)	(5.0)	ヘラナズリ	ヘラナズリ	外面) 7.5YR6/4Cに赤い 褐色 内面) 7.5YR6/2黄褐色		
IS-21	SH10	39	土師器	甕	底部	—	(3.0)	5.8	ヘラナデ	ヘラナズリ	外面) 10YR5/4Cに赤い 褐色 内) 7.5YR6/9褐色		
IS-22	SH10	3	土師器	甕	底部/2	—	(3.8)	5.5	ヘラナズリ	ヘラナズリ	外) 7.5YR6/2Cに赤い 褐色 内) 10YR5/2黄褐色 底) 10YR3/2に赤い 黄褐色		
IS-23	SH10	4	土師器	壺	文部	13.5	15.3	6.3	厚縁	口~胴部) ココ方向のヘラナズリ	外内面) 5YR4/6赤褐色		
IS-24	SH10	30	土師器	付帯非土製品	蓋分	—	(8.5)	—	タテ方向のナデ	ヘラナデ	外内面) 7.5YR5/4Cに赤い 褐色		
IS-25	SH10	25	土師器	甕	口~底部 4/5	14.8	16.0	5.0	口縁部) ココナデ 胴部) タテ方向のヘラナデ	ココ方向のヘラナズリ	外内面) 7.5YR5/9黄褐色	穿孔	
IS-26	SH10	15-1	土師器	甕	口~胴部 1/3	(17.0)	(8.4)	—	厚縁して不明	厚縁して不明	内内面) 7.5YR6/4Cに赤い 褐色 外) 7.5YR4/4黄褐色		
IS-27	SH10	16	土師器	甕	口~胴部 1/4	(17.0)	(10.5)	—	ヘラナデ	ヘラナデ	外) 7.5YR6/9褐色 内) 7.5YR6/4Cに赤い 褐色 底) 7.5YR4/4黄褐色		
IS-28	SH10	30	土師器	甕	口~底部 1/2	(20.5)	(10.0)	—	ヘラナデ、厚縁	ヘラナデ、厚縁	外内面) 7.5YR5/9黄褐色		
IS-29	SH10	33	土師器	甕	口~底部 1/4	(20.0)	16.9	(5.0)	ヘラナズリ	ヘラナズリ	外内面) 7.5YR5/9黄褐色		
IS-30	SH10	32	土師器	甕	口~底部 4/5	(18.4)	16.5	7.0	タテ方向のヘラナデ	ココ方向のヘラナデ 下部) 厚縁ヘラナデ	外内面) 5YR4/6赤褐色		
IS-31	SH23	1	須恵器	両片付 杯	文部	—	(3.2)	(6.2)	ロクロココナデ	ロクロココナデ	外内面) 5G Y5/1オリーブ 褐色		
IS-32	SH23	2	須恵器	両片付 杯	文部	—	(3.2)	(5.0)	ロクロココナデ	ロクロココナデ	外内面) 5G Y5/1オリーブ 褐色	底面は赤み有り	
IS-33	SH23	1	須恵器	両片付 杯	文部	(18.0)	(1.5)	—	ロクロココナデ	ロクロココナデ	外内面) 2.5Y5/1オリーブ 褐色		
IS-34	SH23	1	須恵器	両片付 杯	文部	(13.0)	(3.0)	—	ロクロココナデ	ロクロココナデ	外内面) 7.5Y5/1灰色		
IS-35	SH23	1	須恵器	両片付 杯	文部	(15.3)	(3.2)	—	ロクロココナデ	ロクロココナデ	外内面) 2.5Y5/2黄褐色		
IS-36	SH23	3	須恵器	両片付 杯	文部	—	(3.7)	(5.3)	ヘラナデ	ロクロココナデ	外) 2.5Y5/9黄褐色 内) 5Y 6/1灰色 底) 2.5Y 2/2黄褐色		

第4表 掲載石器観察表 () 推定値 () 残存値を示す。

図録 No	遺跡名	発掘 No	種類	石 質	残存度	位置 (m)			質 量 (g)	注 記	備 考
						長さ	幅	厚さ			
IS-21	SH10	1	磨石	安山岩	完整	13.9	8.0	4.8	899.5	SHNUF・VSH10a	
IS-22	SH10	3	磨石	磨石	—	(5.3)	2.0	0.8	3.4	SHNUF・VSH10b	水製品
IS-24	SH23	1	磨石	安山岩	1/2	34.5	(14.7)	7.2	2,400	SHNUF・VDS1	

第V章 総括

本遺跡の発掘調査によって検出された遺構は古墳時代後期から奈良・平安時代にいたる住居址10棟及び土坑22基などであった。調査区が狭長でありながらも多くの遺構が検出されたことによって、周辺は密度の高い遺構分布を示すものと思われる。

上町遺跡はこれまでの分布調査、本調査及び試掘調査によって弥生時代から平安時代にかけての集落遺跡と考えられていた。古墳～平安時代にかけては検出遺構数も多く、この遺跡の主体的な時期を示すものとして理解されている。また、近隣に所在する町横尾遺跡の存在から縄文時代の遺跡が広がる可能性をも秘めた遺跡であった。

今回の発掘調査では縄文時代・弥生時代に属する遺構は確認されなかったが、これまで上町遺跡では知られていなかったいくつかの事例を確認することができた。これらを踏まえつつ今回の調査成果を概観する。

まず、新知見としてあげることができるのが古墳時代後期の遺構・遺物の発見である。住居址2棟を確認した。ことに10号住居址からは豊富な遺物を得ることができた。これらの遺物は住居が廃絶され、埋没していく過程の中で周辺より廃棄されたものであることが調査の結果確認できた。また、本住居址のカマドは住居を廃絶した時に完全に破壊しつくしていた状態が確認できた。古墳時代後期における住居廃絶のプロセスを解明する上で重要な発見と言えよう。坂城町大字南条地区に所在する青木下遺跡で祭祀行為が行われていた時期と本住居址の時期が一致していることも注目される。今回の狭い調査範囲の中では判然としないが、周辺に古墳時代後期の集落址が展開している可能性がある。仮にそうであるとするなら、坂城消防署建設に先立って行われた発掘調査で確認された掘立柱建物址を擁する集落（寺浦遺跡）の形成基盤がすでに出来始めていたことを物語っているのではないだろうか。

次に指摘できるのは、奈良～平安時代にかけて展開する小規模住居址の存在である。長軸で3mを僅かに超える程度の規模の住居址が4棟（2、7、8、9号住居址）検出された。それぞれカマドを持たない構造のもので、一般の住宅として理解していくには疑問が残る。これらも寺浦地籍で確認されている掘立柱建物群と有機的に捉えておく必要がある。

最後に、本上町遺跡と小谷地を挟んだ対岸に所在する町横尾遺跡もほぼ同様の時期の遺跡である。今回の調査成果を踏まえて、両遺跡の時期的や性格的な問題を比較検討して、谷川・御堂川水系の古代社会の環境を分析する必要がある。また、本調査地点から北に約1km離れた場所に所在する開飲遺跡も小河川付近に展開する集落址である。河川をはじめとする自然環境と、古代集落の関係についても科学的分析を行っていく必要がある。

写 真 图 版



遺構検出状況 (西より)



1号住居址 (東より)



2号住居址 (西より)



3号住居址 (南西より)



4号住居址 (南より)



4号住居址カマド (南より)



5号住居址 (南東より)



5号住居址カマド (南より)



8号住居址 (北より)



7号住居址 (南より)



8号住居址 (南より)



9号住居址 (南より)



9号住居址掘り方完照状況（南西より）



10号住居址（南西より）



10号住居址遺物出土状況（西より）



10号住居址遺物出土状況（南西より）



10号住居址遺物出土状況（西より）



作業風景（南東より）



9-2

2号住居址出土土器(1:3)



13-9



13-10



13-12



13-13

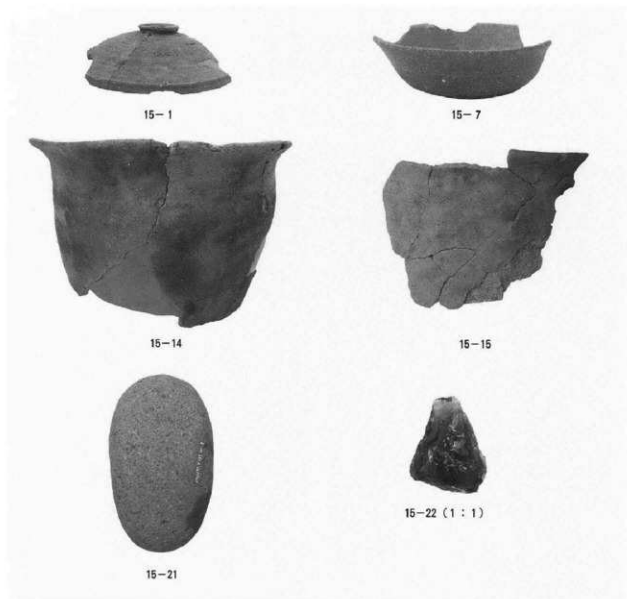


13-14



13-15

4号住居址出土土器(1:4)



5号住居址出土土器 (1:3)



8号住居址出土土器 (1:3)



9号住居址出土土器 (1:3)



25-1



25-4



25-5



25-6



25-8



25-9



25-10



25-11



25-12



25-14



25-17



25-18



25-19



25-23



25-24

10号住居址出土土器 1 (1:3)



26-1



26-2



26-3



26-4



26-5



26-6

10号住居址出土土器2 (1:4)

報告書抄録

ふりがな	うわまちいせきよん・ご
書名	上町遺跡Ⅳ・Ⅴ
副書名	長野県埴科郡坂城町道路改良事業・宅地造成に係る緊急発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	坂城町埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第34集
編著者名	赤池 利博・時信 武史
編集機関	坂城町教育委員会
所在地	〒389-0601 長野県埴科郡坂城町大字坂城6362-1 TEL 0268-82-1109
発行年月日	2009年3月28日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
上町遺跡Ⅳ・Ⅴ	埴科郡坂城町大字中之条	20521		36°26'40"	138°11'41"	2008年7月7日～ 2009年3月19日	319㎡	町道拡幅事業・宅地造成事業

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上町遺跡 Ⅳ・Ⅴ	集落址	縄文～平安	竪穴住居址 10棟 土坑址 22基 不明遺構 1基	土師器・須恵器・石器	古墳～平安時代の集落址の調査

坂城町埋蔵文化財調査報告書

	『開飲製鉄遺跡—第1次調査報告書』	1977
	『開飲製鉄遺跡—第2次調査報告書』	1978
	『東裏遺跡』	1983
	『中之条遺跡群 宮上遺跡Ⅱ』（概報）	1993
	『南条遺跡群 塚田遺跡』	1993
第1集	『南条遺跡群 東裏遺跡Ⅱ・青木下遺跡』	1994
第2集	『町内遺跡発掘調査報告書』	1994
第3集	『町内遺跡発掘調査報告書』	1995
第4集	『南条遺跡群 塚田遺跡Ⅱ』	1995
第5集	『豊饒堂遺跡・上町遺跡・寺浦遺跡・東町遺跡』	1996
第6集	『中之条遺跡群 寺浦遺跡Ⅱ』	1996
第7集	『中之条遺跡群 上町遺跡Ⅱ』	1996
第8集	『上五明条里水田址』	1996
第9集	『町内遺跡発掘調査報告書1995』	1996
第10集	『坂城町試掘調査・立会い調査報告書』	1996
第11集	『町内遺跡発掘調査報告書1996』	1997
第12集	『戊久保・町横尾遺跡』	1998
第13集	『込山Bほか 発掘調査報告書 1997』	1998
第14集	『町内遺跡発掘調査報告書1998』	1999
第15集	『町内遺跡発掘調査報告書1999』	2000
第16集	『開飲遺跡Ⅲ』	2000
第17集	『中之条遺跡群 北川原遺跡Ⅱ』	2001
第18集	『町内遺跡発掘調査報告書2000』	2001
第19集	『中之条遺跡群 宮上遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ』	2001
第20集	『金井東遺跡群 保地遺跡Ⅱ』	2002
第21集	『町内遺跡発掘調査報告書2001』	2002
第22集	『町内遺跡発掘調査報告書2002』	2003
第23集	『豊饒堂遺跡Ⅲ』	2004
第24集	『坂城町町内遺跡発掘調査報告書2003』	2004
第25集	『坂城町内遺跡発掘調査報告書2004』	2005
第26集	『坂城町内遺跡発掘調査報告書2005』	2006
第27集	『込山遺跡群 込山C遺跡Ⅱ・Ⅲ』	2006
第28集	『込山遺跡群 込山D遺跡』	2007
第29集	『坂城町内遺跡発掘調査報告書2006』	2007
第30集	『南条遺跡群 青木下遺跡Ⅱ・Ⅲ』	2007
第31集	『開飲遺跡Ⅳ』	2008
第32集	『町横尾遺跡Ⅱ』	2008
第33集	『坂城町内遺跡発掘調査報告書2007』	2008
第34集	『中之条遺跡群 上町遺跡Ⅳ・Ⅴ』（本書）	2009

坂城町埋蔵文化財調査報告書第34集

中之条遺跡群 上町遺跡Ⅳ・Ⅴ

発行日	2009年3月27日
編集者	坂城町教育委員会 〒389-0601 長野県埴科郡坂城町大字坂城6362-1 TEL 0268 (82) 1109
印刷者	信毎書籍印刷株式会社 〒381-0037 長野県長野市西和田1丁目30番3号 TEL 026 (243) 2105

